

# 立命電友会

## 立命館にはいれて

### ツイてました

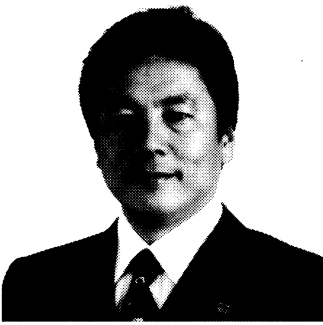
㈱トーセ 代表取締役社長

齋藤

茂

(昭和五十四年卒)

立命館に中・高・大と十年間お世話になる事になった私の場合、父が立命館大学理工学部電気科卒で、且つ会社経営をしていた事もあり、小学生の頃から、中学は立命館にはいり大学まで順当に過ごし、父の会社を継ぐ事が運命づけられていました。私自身もその件については何の反発も無く学生生活を終えたわけですが、まさか入社して半年で会社が新設されて、



その会社を任せられるとは思ってもみなかったわけですが。もともと父の会社は東亜セイコーと言って、松下電器の共栄会社として順調に発展し、本年で五十一年目になります。その会社が私の卒業及び入社する時期に、当時大ヒットしたインペーターブームの中、テーブル型ゲームの生産をしていたわけです。しかし、あまり由緒正しい仕事でなかった為に、松下側からクレームがはいり、ゲームからは撤退する事になりました。しかしながら利益も出て、「遊び」というものに注目していた事もあり、別会社なら文句ないだろうといった判断を父が下して、㈱トーセがスタートする事になりました。まさかその会社が一九七九年の設立から二十年目にして大証二部上場、二〇〇一年には東証一部上場する

とは、私自身も想像すらしませんでした。今から思えばタイミングといい、たまたま私がクリエイターとして適性があった事や、京都でスタートした事等、全てがうまく仕組まれていたように発展してきました。当然、ツキや運に恵まれていて、何度かの方針転換の際も、時代があとからついて来てくれた事が、何度もありました。

では、少し学生時代の事を思い出しますと、大学での生活パターンは、午前中は必須授業かパチンコ、午後は茶道部、夜はお酒といった普通の学生でしたが、パチンコは友人に教えてもらった事もあって、在学中に約二五〇万円位を稼ぐ事ができました。四回生の時にヨーロッパ旅行に行った資金も、この一風変わったアルバイトによるもので、後輩を飲みにつれて行く費用も余裕で稼いでいました。茶道部に関しては、母の里が茶陶を扱っていた事もあって、家に素晴らしい道具がたくさんあって、これらを利用しない手はないという事で入部する事になりました。決して女の子目当てではないのです。当時の茶道部には五十名以上の部員がいて、しかも六割以上が男であり、けっこう体育会系

のきびしさがありました。お茶会前の強化練習では、一日六時間正座をさせられて、苦痛と冷や汗でじっとがまんする姿がいまでも目に焼きついています。

それでは、私の大学時代の印象を話したいと思うのですが、学生

の大半が京都以外からの人で、中・高と京都人の中で育ってきた私には、社会に放り出されたような刺激がありました。時間も自由に使用、休講なども結構あったので、竜安寺や等持院、金閣寺などにもよく行きました。その点、今の草津は少しかわいそうな気がしますが、まわりのロケーションは大切な要素であって、校舎の美しさや設備では決して補えないものです。これからは新しい草津ならではの立命館づくりを見守っていきたいと思います。幸い今の立命館は元気の良さが目立ちます。国際化やボーダレス対応、ベンチャーや産学提携へのとりくみにおいても、必ず立命館の名前があげられます。私自身も講演に呼ばれたり、いろいろな組織の役員になったりする中で、お役に立てる事も喜んでいきます。母校が元気な事は、私達にとってもこれ以上ないはげみになる事は言うまでもありません。

最後に、最近思う事を書かせて頂きたいのですが、まさにIT革命の世の中に皆様はいます。情報はじっとしていても向こうから飛び込んでくるのです。いわゆる情報の氾濫とマスコミやインターネットにより、ベンチャーブームや中国脅威論等、いろいろなものが作り出されてきました。それを受けて、今の学生はあまりにも急ぎ過ぎていくように思います。実は自分にとって相応しいチャンスは、毎日毎日押し寄せて来るものでもないのです。要するに数少ないチャン

スが来た時に、それを生かせる資質が自分に備わっているか、又、協力者は確保できているのか等、受け入れ準備こそ大切であると思います。私自身もがむしやらに働き、一九八三年のファミコンブームにうまく乗りましたが、第二の柱である、iモードに代表されるモバイルコンテンツの開発で成功するまでに十六年の年月を要しているのです。その間、教育用ソフト、ナビゲーション関連等いろいろ試しましたが、うまく行きませんでした。もちろんチャレンジ精神やプラス思考は必須ですが、五年や十年で成功・失敗を決定づけるのはまちがっています。長い目で見る余裕を持って下さい。そして情報の大切さを常に認識して下さい。自分にとっての情報源は必要です。その情報には二種類あって、デジタル情報は、インターネットやモバイルで早く簡単に入手可能である反面、途中のプロセスや雰囲気や誤りを悟る事がなく、危険な面もあり、一方、アナログ情報は、毎日の勉強や講演会への参加、最も大切な人脈づくり等、時間がかかるデメリットはありますが、正しい自分にとって有意義な価値のある情報を得る事ができます。又、他の人からの情報入手に対して大切な事は必ず、ギブ&ギブ&ギブ&...: テイクの気持ち忘れないうで下さい。良い事をすればいつか自分に必ず返ってくるものです。

執筆ご依頼に感謝

### BKC新展開とともに

— 定年退職のご挨拶にかえて —

電子情報工学科 濱川圭弘

一九九六年四月、電気電子系の新学科として光工学科が創設されるとともに本学に赴任する御縁に恵まれ、この三月に定年を迎えることとなりました。

思い返せば、一九八〇年代の終り頃、まだ構想の段階より関わってきた光工学科、そして、ピッカピカのキャンパス、それにこの新学域では吾が国のトップクラスが出揃ったスタッフ陣、正にここで数年、もう一仕事！という胸のふくらむ想いの着任でした。

当学系では、電気電子工学科と光工学科の二学科のカリキュラムの基礎専門科目はもとより学科共通専門科目をほぼ共通化すると、卒業研究も学生の希望によって学科の壁を越えて選ぶことができる等の新構想のお陰で、学科創設の当初より、電気電子工学科に所属する四年卒研究生や院生が研究室に入ってきてくれて、新大陸に上陸した開拓者よろしく、ニューフロンティア精神に燃えて研究室の建設に励みました。それには、文部省科学研究費、日本学術振興会未開拓プロジェクト、通産省ニューサンシャインプロジェクト、大阪

府トリベール計画、そして幾つかの企業からの奨学金等外部の資金導入に恵まれたのも大きな幸いだったと思います。着任早々の六月、新学科創設のキャンペーンの一環として開放講座が開催され、学科を代表して「光で拓く二十一世紀」と題する講演をさせていただきました。今になって振り返ると、そこで触れた夢はまだまだ成熟技術に至ってないにしても、当学科内の各研究室の研究成果は、

着実に現実のものになりつつあることを実感して、慶ばしく思っております。

一九九七年四月に総合理工学研究所の副機構長を拝命しました。理工学部のBKC移転を機に新しく設けられた本学特有の組織です。折しも国の科学技術基本法が制定され、五年間で十七兆円という国家予算が組まれて、文部省のみならず通産省や科学技術庁からも多くの新プロジェクトが組まれた時機でした。そしてこの予算は地方公共団体にも波及しました。そこで、本機構では、重要プロジェクトへの申請には運営委員会であらかじめヒヤリングをして討議・改

善するなど、幾つかの新戦略を立てて対応し、際立った成果をあげる事が出来たと思っております。産官学連携とか、地域振興プロジェクト、提案公募型プロジェクト等の言葉が出はじめたのもこの頃でした。

一九九八年一月、大南総長より副総長、副学長就任を申しつかり四月の発令前から経済、経営学部の移転とBKC新展開の諸行事に参加して挨拶する機会を与えていただく榮譽を浴しました。理工学部を含めて、文明活動の実利をめざしたBKC三学部の同居という特質を活かした新しい教学活動として、「文理融合」とか、教育面での相互乗入れ、「インスティテュート」の創設などが実現し、文部省をはじめ学の内外からも注目されるBKCが出来上がったことを何より嬉しく思っております。

二〇〇〇年の四月、国の省庁改革と関連した新しい官職就任に伴って副総長を辞し、総合情報センター長を拝命し、学内のIT化の推進に力を注いで参りました。最後に、日々親しく御指導下さった衣笠本部長ならびにBKC役員室そして、学部、学系の諸先生方と各事務局の皆様にも厚く御礼申し上げます。

### 私の願い

電子情報工学科 池田光男

皆さんは携帯電話をお使いでしょうか。画面には色がついてますね。その色に注意されたことはありませんか。白い蛍光灯の下で見ても、赤っぽい電球の下で見ても、色は同じと思われませんか。いいえ、異なります。電球の下では少し緑っぽくなります。これでは困りますね。まだ今は困らないかもしれませんが、でも、携帯電話の画像でジョックピングする時代が来るとそうは言うておられません。注文した色と違う色の商品が送られて来るかもしれないからです。なぜ照明光源の色によって携帯の色は変わるのでしょうか。その答えを出したのが

私が見えの研究であり、これが私たちヒューマンビジョン研究室の研究なのです。篠田助教教授（四月から教授になられます）とのコンビでやってきました。

私たちの研究室で開発してきた照明認識視空間の概念です。携帯の画面は透過型と言われます。バックライトから光が出てきて、液晶パネルを通して、色となります。つまり携帯の画面の色は物理的にはどこへ持っていくとも変わらないのです。ところが人間の方は異なります。赤っぽい照明の所に行くと赤に適応し、白っぽい照明の所に行くと白に適応します。変わる視覚系が変わらぬ携帯の画像を見ると、携帯の方が変わったと見えるのです。こういうことを研究

私が立命館大学理工学部にて教授として採用されたのは七年前です。一九九六年です。このとき私は二つのことを実現したいとねがいました。高い研究レベルの研究室にすることが一つです。研究が活発だと学生も刺激され、博士後期課程に行ってもっと研究したいと思うようになります。大学の評価が上がります。そのため私たちは視覚情報処理や色覚の研究を一生懸命やりました。成果は出たと思っております。私たちはこの七年前に十四の学術論文を出しました。学会のプロシーディングは入れていません。学生の一人は一九九九年に日本光学会奨励賞を、次の年には照明学会研究奨励賞をもらいました。今、彼女はアメリカの大学でPDとして研究を続けています。彼女を見て後輩も博士後期課程に進学してきました。今、D2が一人、D1が一人、D0が一人います。そしてタイからの国費留学生

もいてD2が二人います。合計五人です。成果は出たと思います。

もう一つの願いは研究室の国際化です。学生が恐れることなく、抵抗なく、国際学会に出席し、論文を発表する雰囲気にしたとねがいました。これも達成したと思います。先ほどの卒業生からD0の学生まで、みんな国際学会で発表してきました。京都、ポーランドのワルシャワ、韓国のソウル、アメリカのロッチェスター、そして今年にはタイのバンコックです。

現在タイからの留学生がいることもあって、研究室では英語が頻繁に使われます。外国への抵抗感はいなくなるとは言えませんが大分少なくなってきたと思います。私は学生の尻を叩いてばかりいるわけではありません。私も努力してきました。国際色彩学会の会長を四年間務めました。また今年私の研究活動に対してこの国際色彩学会からジャッド賞という高い評価の賞を頂くことになりました。この八月にはバンコックで授賞式と受賞講演があります。苦勞を一緒にしてきた篠田先生と学生数名とともに出席します。

二つの願いをほぼ達成して定年を迎えることが出来るのですが、それを可能にしてくれた要因も二つあります。この大学の環境がとてもよかったこと、学生がよかったです。大学の環境では研究

スペースと研究費に恵まれました。科学研究費を連続して交付してもらえたのも大きいですが、大学が毎年しっかり実験実習費として研究費を支給してくださったのが安心して研究を続ける要因となりました。学生もいろいろが沢山あります。とくに博士後期課程に来る学生は一流です。磨けば素晴らしい研究者になる素質を持っています。ネバダ大学で活躍している溝上陽子博士がそれを証明しています。

今、定年で大学を出ていきますが、私のつぎの願いは、このように作り上げてきた研究を、後の人たちが更に発展させてくれることです。立命館に視覚光学あり、視覚情報処理あり、色彩学ありと、日本光学会、照明学会、日本色彩学会、日本視覚学会、眼光学会、産業・労働・交通眼科学会に評価が確立しました。それが定着するようににねがいます。それでは篠田先生や学生たちにバトンタッチしましょう。



### 衣笠とBKCでの思い出

電気電子工学科 川畑隆夫

平成五年、新緑の美しい衣笠キャンパスへ着任した頃をつい最近のことのように思い出す。はや十年が経ち、停年退職を迎えることになった。

衣笠で最初に受けた強い印象は、戦略立案に基づく果敢な経営が継続的に行われていることである。私学はビジネスの面も強いことが判ると共に、大学という多様な価値観の教職員からなる組織で、このような運営ができる指導力に敬服した次第である。このような戦略経営の成果が今日の大きく進展したBKCであると考えられる。

ところが大学では、委託研究をのぞくとそのような制約はなく、自由に研究発表できることが有り難い環境であると感じた。一方、とまどったのは少ない研究予算と非力なチームである。もう一つの大きな問題は、三十歳台までは細かい設計や実験を自分自身で手がけていたが、その後は管理が主であったので、その間に著しく進歩した回路やリアルタイム制御ソフトなどの詳細を把握していないことである。そのため、初めは学生諸君と試行錯誤し、基礎を確立するのに苦勞したものである。

三十三年にわたる三菱電機の工場勤務では、発電や鉄鋼プラントなどの顧客の生産設備を競合の末に受注・納入し、それ等が十年、二十年と無事稼働することが最大の技術者冥利であった。これらの製品では原価、性能、信頼性などがバランスの良い競争力を有すること、さらに生産性や保守性なども重要である。したがって先端技術の秀才より健康優良児的な設計の製品が良いことが多い。このような中でも時には学会発表にふさわしい製品が完成することもあるが、それは組織の成果であるので発表は、はばかられる場合が多い。と

BKCへ来た頃、二号助手のエジオグ・エメニケ氏および、学位を取得し教職を目指したいと云うK君が辻村先生のご退職に伴い私の研究室に来てくれたことが幸いし、途切れることなく継続的に研究を展開できるようになり、DSPやRISCによるリアルタイム制御の基礎を確立できた。三年目の頃から成果も出始め、さらにK君が学位を取得する頃には、国際学会や学術論文誌へ継続的に投稿できるようになった。また、卒業研究では新エネ、省エネ、自動車、電車、などに関するパワーエレクトロニクスを希望する優秀な学生諸君が来てくれ

た。その中には、しばしば朝の七時頃には出て頑張った学生も居て、成果を出してくれた。数年前からは、国際学会もできるだけK君や院生が発表するようにしたので、ベルゲン、ローザンヌ、北京、パリ、ケアンズなどへ小松先生や学生諸君と出かけ、山歩きなどをしたのを思い出す。最高はスイスアルプスの山道を一日に二十五キロも歩き堪能したことがある。さらに、K君と院生だけが行って発表することも多くなった。その結果、院生の国際学会発表は、国内開催分も含めると十六件にもなった。上に述べたK君はこのたび助教として採用された川畑良尚君である。疎開で速水小学校、浅井北中学校と滋賀にはなぜか縁が深かったが、さらにここ草津のBKCでお世話になったこと、また同じ研究室名が続くことになったことなど、不思議な縁を感じる。失われた十年と云われるが、立命では大きく発展した十年であった。このような明るい環境で若い学生諸君と企業ではできないような研究テーマを楽しむことができ、恵まれた思い出深い年月であった。最後にBKCのますますの発展を祈念するとともに、学生の就職や研究活動を通し、お世話になったOBをはじめ京滋地区やその他各地の企業の方々にお礼申し上げます。二〇〇三年一月記

立命電友会創立十周年記念祝賀会に参加して

石井 英 敏  
(昭和四十五年卒)

二〇〇二年十月十九日(土)は私にとって期待と不安の入りまじった日でした。

しかし当日は傘を持参しなればならないような天気にもかかわらず、会場につけば大勢の参加者が会場に早い時間からあふれていました。

私の不安は一気に吹き飛ばされてしまいました。

参加者の総数は約四百名、特に同伴者が五十名弱いたせいもあって会場は華やいだ雰囲気になっていました。

会は十三時三十分池田育弘立命電友会副会長の開会宣言にてスタート、混声合唱団メディックスと参加者全員にて校歌斉唱、来賓の紹介が行われました。

続いて加納久雄立命電友会会長の挨拶、立命館学園が二十一世紀の我が国教育界をリードする総合学園に発展した事、その証明として文部科学省の二十一世紀COEプログラム(日本の大学を世界最高水準の研究拠点に育てるために研究資金を重点配分する制度)に私大の中で早稲田、慶応の五件に次いで三件の採択を得たことなど、先進的私学としての現状の報告を

始めとして、これからの躍動する立命館を彷彿させる素晴らしいものでした。

その後立命電友会十年の歩みが、液晶プロジェクトにて紹介され、順調に歩み行く電友会の姿を、参加者全員にて確認しました。

最後に蟹江嘉信校友会副会長、浅賀博理工学部同窓会連絡協議会会長祝辞、祝電披露にて式典を終了しました。

続いての記念講演会は本学の特任教授で上方芸能の代表であられる木津川計氏の軽妙な話術は、会場の参加者の心に上方の笑いの真髄を伝える素晴らしいものであり、このような先生を擁する現在の立命館の躍動感を感じさせるに十分な講演でした。

次はテレビ番組やコンサートの活躍される本学産業社会学部を一九九六年に卒業された中国古筝奏者の伍芳(ウー・ファン)さんの心に響く演奏は中国楽器の素晴らしい音色を私たちに与えてくれるにすぎない演奏でした。

それから懇親会に入り田中道七副総長、児島孝之理工学部長から祝辞をいただき森本朗裕電気電子・光学系系長の乾杯にて楽しい集いはスタートしました。

立命館大学混声合唱団メディックスによる日本の歌などの合唱、本学産業社会学部を一九九四年に卒業された民謡歌手、大野美佐子さんのきれいな歌声、会はずます盛り上がりで行きました。

当然のことながら、卒業年次ごとにまとめられた座席の配置はなつかしい旧友との語らいをいっそう楽しいものにしました。

気がつけば時間は六時前、会はファイナルを迎え、全員にて立命館大学応援歌を合唱し最高の盛り上がりにて幕となりました。最後は津田川勝立命電友会副会長の閉会挨拶により締めくくられました。

尚、私は参加しませんでした。午前中に行われた衣笠キャンパス見学会には小雨の悪コンディションにもかかわらず、予想を大幅に超える八〇名弱の方々が参加されたそうです。

陪審法廷紹介DVD放映のあと、末川記念館を出発し、末川先生の言葉、未来を信じ、未来に生きる

と書かれた衣笠一拠点完了石碑を見学、続いて妖壽不貳修身以俟之所以立命也と書かれた立命館由来石碑の見学、その後中央広場を通り、存心館(旧四号館)、有心館(旧旧四号館)前を通り、西側広場(二号館、三号館後)周辺を見学、その後研心館、諒友館(旧七号館)、海洋館(旧新四号館)、恒心館(旧六号館)、啓明館(旧一

号館)、清心館、学而館前を通り、図書館前の理工学部発祥の地石碑を見学、志学館前を通り以学館前に到着、ここで一旦解散自由行動存心館地下生協食堂、近隣の思い出の食堂等にて昼食をとられたそうです。

キャンパスの案内では池のあった所は?、赤門の場所は?のように昔の場所は今はどこにどのような質問が多かったそうです。

以上が私の感想と報告ですが出席された方々にとりましては私と同様に素晴らしい記念祝賀会だったと思っております。

十周年祝賀会の内容及び写真等はHPに掲載していますのでぜひご覧になって下さい。  
<http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/>



# 「立命電友会会報」と私

業務監査室 久保之俊

一九六六年四月 立命館事務職員として、衣笠キャンパス学生課衣笠分室に赴任しました。以来衣笠山を仰いで三十七年間、皆様のあたたかいご援助のもと定年を迎えました。旧一号館学生課分室で学生諸氏の課外活動援助、下宿奨学金、アルバイト援助から始まり、二号館基礎工学科事務室では二部学生生活全般、そして大学も社会も改革と激動の時期は学而館、中川会館で就職部に十六年間、とりわけ理工学部の方には大変お世話になりました。

就職部では、引き手数多の売り手市場就職戦線で電気工学科は先頭を走っていた。「是非わが社に……」の懇願あれども推薦すべき学生がなく、困り果てた就職委員の先生の顔が浮かぶ。その頃のよきことばかりが思い出される。

有心館にはよく出向いたが、狭い研究室、実験室には多くの教材・機材で埋まり、廊下にも物品がはみ出し、昼なお暗い状態は、お世辞にもよき環境とは言えない処であったが、先生方も学生諸氏も熱心に取り組んでおられた。

移転後、建物は全面改装か取り

壊して、当時の面影を残すものは内燃機関の「興学館」と図書館前の「立命館大学理工学部発祥の地」(相訪会)の建碑のみになってしまった。建碑に至っては、生垣で遮られて見にくい状態にあるのがちょっと寂しい。

でも、過去の資料で小原誠先生、松田長生先生、浦山隆先生、井上和夫先生ほか多くの先生方の名前が出て来るたびに当時は思い出している。

一九九二年秋の頃、キャンパスで辻村寛先生にお会いし、先生から「立命電友会」会報の題字を書いてほしい旨、依頼を受けた。

今、会報二十号に先生がお書きになった文章とお写真を見ながら、当時のことを思い出す。その時お受けすべきか、否か、私なりに悩んだ。すばらしい歴史と、一万余名を越える会員諸兄を擁する会報のトップを、私ごときの者でよいものか。学内には著名な方々がおいでになるのに……先生から強い依頼もあって書かせていただくこととなった。

やがて一大飛躍となる学部移転となったが「立命電友会」会報は、

私には逆に近い存在になっている。会報が出来るとすぐ「あいさつ状」を入れて欠かさず届けてくださる。今では題字にも見慣れ、内容で専門分野は理解できない個所もあるが一読し、最後に奥付欄の横を見るたびに何とも恥ずかしいと思う気持ちは十年経っても変わらない。

会報十五号には荻屋公明先生が、これからの教育研究についてご意見を書きになっておられるが、グローバルゼーション化は急テンポで進むといったものはない。

国際的競争力を維持するために、教育レベルの向上を基礎に研究開発力をつけ、その成果を社会にどう生かすかの力量が問われている。

十八歳人口の減少、学力低下問題、国際化への対応、私学間格差など、その課題には、枚挙にいとまがないが、立命館前進の力は全教職員が一丸となった課題設定に始まり、目標を明確にする。全学で議論する。そして、OB諸氏をはじめ各界からの意見や力をお借りして企画・計画し創造的営みに転化する力量は、この局面を乗り越え、近い将来、世界のひのき舞台上で活躍の時が来ると信じてやみません。

その先頭を行くのが理工学部で

あり、電気電子工学科、電子光情報工学科であると思います。学系のご発展とあわせて会員諸兄の益々のご活躍ご健勝をお祈り申し上げます。有難うございました。

## 同窓会便り

### 立電三〇会

前田 稔 夫

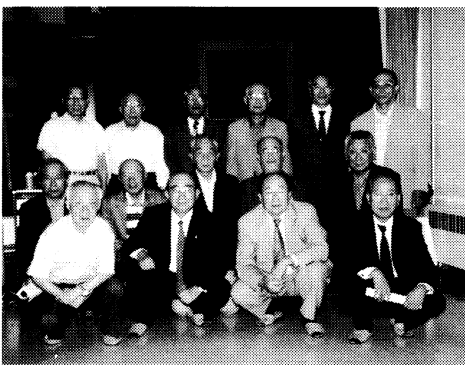
同窓会は二〇〇二年九月十三日(金)、十四日(土)に開催された。二〇〇〇年十一月九日以来二年振りの開催で、今回は同窓生からのアンケートを参考に、会としては初めての一泊で計画され、中山会長の尽力で芦屋のよみうりテレビ六甲山ビラを会場とした。場所的には六甲山麓の一角に位置し、所謂芦屋別荘地に隣接し、芦屋市

街地とその向こうに瀬戸内海がパノラマ状に眺望できる申し分のない会場であった。九月中旬とは言え残暑は厳しく下界よりは気温が二乃至三度低く快適な一夜を過ごすことが出来た。

今回は集合時間が十七時であったため三々五々来会する同窓生をロビーで待ちながら談笑し、陽の落ちるのを待って会場のテラスで開宴となった。二部の同窓生二名を含めて十五名が一同に会し、パーベキューに舌鼓を打ち、ジョッキを傾けながら、近況(仕事、年金、健康、家族、趣味等々)や学生生活の思い出等を語り合い旧交を温めると共に親交を深め合うことが出来た。

なお、席上で中山会長と柴田勇幹事から、次回は二〇〇三年五月頃開催したいとの提案があった。

今回の参加者は永楽、岡本、加納、川崎、小槻、柴田勇、柴田卓、中山、樋口、藤岡、前田、松本貞、村上、屋敷、吉田捨(敬称略)の十五氏であった。



二〇〇二(平成十四)年度 電気電子・光系卒業生進学・就職状況

平成十五年三月に卒業した院生、学生の進路・就職状況は別表の通りとなりました。

電機業界の半導体部門は、平成十三年度に「過去最悪の不況」と言われました。平成十四年度は、通信機器部門が深刻な不況にあえいでいます。この不況は長期化が予想され、深刻さの度合いは半導体部門以上といわれています。

日本の機械業界は約一〇〇社もある過当競争の構図が続いており、再編による規模拡大で力を伸ばす欧州勢などにシェアを奪われつつあります。鉄鋼業界でも需要低迷で、大手六社の平成十四年度の設備投資計画は、前年度比三割減となつています。

以上のように、当期も各業界では不況から抜け出すことができませんでした。しかし、本学系は伝統的な繋がりを多くの企業との間に有し、また先輩の活躍する様々な企業もあって、当期も例年と同様、多くの求人をおいただきました。当学系では従来から電機業界への就職が多く、上場企業に多数進出しているのが特徴で、表2からその傾向がうかがえます。また、成長分野である自動車関連、情報機器製造業および、LSI設計企

業やLSI製造メーカーへの進出が増えています。さらに、情報処理サービス業への進出も多く見られます。

先輩の方々からのご支援により就職できたケースも多く、お礼申し上げます。なお、今後とも後輩たちの就職活動に暖かいご支援とご協力をお願い申し上げます。(就職委員 小松 康廣)

I. 卒業生・進学者・就職者一覧

(2003年3月20日現在)

Table with 5 columns: Category, Graduates, Advanced Students, Job Seekers, and Others (including activities). Rows include Graduate School (Electrical), Graduate School (Optical Information), Electrical/Electronic Engineering, Optical Information Engineering, and Total.

II. 就職先一覧

(大学院・修了生の就職先も含む)(順不同敬称略)

Table with 3 columns: Industry Type, Company Name, and Number of Companies/Students. Rows include Electrical/Mechanical, Power, Automobiles, Iron/Steel, Transportation/Communication, Broadcasting, Construction, Printing, Information Systems, and Others.

### 同窓会便り

#### 昭和四十二年卒同窓会便り

**前略** 昨年の十月には電友会創立十周年記念祝賀会を盛大裏に終える事が出来、電友会設立当初から携わり設立委員(産みの親)の一人として感慨深く慶びにたえません。又昭和四十二年卒生としましても同伴者を含め二テールも占有する事になり嬉しい次第です。近畿圏以外の遠方出席者も多数あり感謝しております。

さて我々昭和四十二年卒業生はまとまりが良くて、何か行事がある際には連絡を取り合いますと二十人位はすぐ集合できるような友達付き合いが未だにあります。

卒後三十周年記念同窓会には御招待の先生も含め六十名近くの出席者があり大変に盛り上がりました。当時、助手をしておられました浦山先生とは特に仲が良く今も先生を囲んで夏にはビアガーデン等へ繰りだしています。

卒後三十五年、卒業生全員が功遂げ名を上げる事は出来なかつたかもしれませんが、四年間衣笠学舎で過ごした多感な青春時代の友情は各人の人生航路が多岐にわたり開いていっても揺らぐことは無いと信じています。あと数年で定年を迎える年齢になりましたが、何時でも好きな時に集まり学生時

代を語りあえる様な同窓会が出来たらと念願しています。

注 写真は電友会創立十周年記念祝賀会の時です。  
記/南 能寿



### 予告

浦山研、辻村・前田研  
合同同窓会開催

平成十五年六月七日(土)夕刻より一泊にて、浦山研究室同窓会と辻村・前田研究室同窓会との合同による同窓会が開催されることになりました。初めての企画ではありますが、多数の同窓生の参加を期待しています。詳細が決まり次第、改めて案内状をお送りしますので、お楽しみに!

浦山研同窓会 加藤 義彦  
辻村・前田研同窓会 藤井 力広

### 学系便り

#### 平成十五年度の

電気電子・光系の主要な委員

学系長

(電気電子工科学科長)

荒木 義彦

副学系長

(電子情報工科学科長)

小野 雄三

企画委員

高山 茂

就職委員

溝尻 勲

研究委員

津田川 勝

学生委員

田口 耕造

教務委員

藤田 智弘

篠田 博之

【退職】

濱川 圭弘教授

平成十五年三月三十一日、定年退職。

池田 光男教授

平成十五年三月三十一日、定年退職。

川畑 隆夫教授

平成十五年三月三十一日、定年退職。

【昇任】

篠田 博之

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科助教授より、同学科教授に昇任。

【新任】

沼居 貴陽

平成十五年四月一日、電気電子工科学科教授に着任。

福井 正博

平成十五年四月一日、電気電子工科学科教授に着任。

藤野 毅

平成十五年四月一日、電気電子工科学科教授に着任。

川畑 良尚

平成十五年四月一日、電気電子工科学科助教授に着任。

齋藤 茂

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科教授に着任。

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科教授に着任。

藤枝 一郎

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科教授に着任。

笠原 健一

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科教授に着任。

田口 耕造

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科教授に着任。

佐々木 誠

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科講師に着任。

文 雅司

平成十五年四月一日、電子光情報工科学科講師に着任。

教員OB 山本 茂先生

平成十五年三月二日卒年

氏名

昭和十九年 岡田 善富

平成十四年七月九日

昭和十九年 泉谷 一文

平成十四年九月十一日

### 訃報

教員OB 山本 茂先生  
平成十五年三月二日卒年

氏名

昭和十九年 岡田 善富

平成十四年七月九日

昭和十九年 泉谷 一文

平成十四年九月十一日

### 事務局便り

会報二十一号の発行にあたりご寄稿いただいた皆様方には、心より御礼申し上げます。

昨年の十月十九日に開催されました創立十周年記念祝賀会では、お忙しいところたくさんの方々にご出席を頂きまして、有り難うございました。会員名簿は会員相互の貴重な財産であります。その充実をはかるべく、今後とも皆様のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

立命電友会連絡先

〒525-1857

滋賀県草津市野路東一―一

立命館大学理工学部電気電子・光系内

立命電友会事務局

高山 茂

宮林(月・木)

電話 〇七七(五六)二六六二

FAX 〇七七(五六)二六六三

E-mail: denyukai@ml.ritsumei.ac.jp

http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/ (会報の題字は久保之俊氏)

昭三二年 村上 敏雄

昭三二年 日比 義雄

昭三二年 大西 健

昭三二年 加藤 太郎

平成十年七月二二日

昭三八年 藤本 幸生

昭三八年 深見 正昭

昭四一年 服部 康彦

平成十四年八月七日

昭六一年 中島敬一郎

平成十四年六月二三日